アビリティー・ウェイク

なごみーぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アビリティー・ウェイク

【Ｎコード】
Ｎ９８７３Ｚ

【作者名】
なごみーぬ

【あらすじ】
人々の生活の中に突如としてあらわれた”能力者”という存在・・・
主人公バレットに関わる様々な能力者、そして組織！
嬉々とした高校生活・・・とはいかないみたいです
※中二的なキャラ付けや分かりにくいパロディネタ、口調の酷さやセリフ台本書き・・・などなどありますがそれでも読める人はどうぞ
１０話未満程度で完結する（予定）です

※どんな意見でも構いません、感想や評価をもらえたら凄くうれしいです

※自身のＦＣ２ブログの方でも記事としてアップしてあります。無断転載ではありませんのでご了承ください

1話　ウィクトルナンバー（前書き）

ありがちな”能力バトル学園モノ”という題材で書いてみました

キャラクターの区別をつけやすいため、口調などは大げさにしている つもりです

小説を書き始めて日も浅いので厳しい意見やご感想など大歓迎です

1話　ウィクトルナンバー

この世界はここ数年でガラリと変わった

何故か

簡単に言うと、能力という奴が世間一般に知れわたるようになったからだ
要は、怪光線や電撃を撃ち放ったり、高速移動やテレポートできたり…
そういう人間が世界各地で増えているようだ
能力を持つ人間は問答無用で優等生…成功者として称えられる存在なのだ

正直、無能力者からしたら羨ましいなんてもんじゃない
…まあ、正直こればっかりは運なので仕方がない…よな…

…

～ミティオライト高等学校～

時は４月の中旬
生徒たちは入学式も終え新しい校舎、学級にも多少は慣れを覚えつつある頃だろう
そんな中、休み時間を無意義に机に突っ伏して過ごしている
棘々した髪型の男子生徒が１人

名を”バレット・ルージット”

バレット「はぁ…」

机に散乱したプリントや教科書に眠そうな視線を送りながらため息をつく
そんなバレットに嬉しそうに近づく女の子が1人
金髪の長髪をなびかせている

名を”エリス・サジテール”
エリス「こらぁバレット！お昼休みなんだから外行こ！外」

ふてくされた表情でエリスを睨みつけるバレット

バレット「そんな時間は無ぇよ、見ろよこのレポートの数」

エリス「ただの宿題じゃん！家でやればいいんじゃないの？」

バレット「今日中」

エリス「えぇ…ん、でもそもそもバレットが授業サボったり居眠りしたりするせいじゃないの？」

バレット「うるせーな…良いよなぁエリスみたいな能力者様は、宿題はおろか授業すらサボっても単位やら進学には全く無問題」

エリス「私はちゃんと勉強してるよぉ！」

バレット「今日は午前の授業オールサボりだったじゃねえか」

その言葉に苦笑いしたエリス、だがすぐに自慢気な表情に変わった

エリス「ふふん♪今日はこの高校の”ウィクトルナンバー”の第４位を負かしてやったんだよ♪」

バレット「ウィクトルナンバー？なんだよそれ」

エリス「この高校には三十人近くの能力者が居るらしいのよね！そしてその中で最も強い7人がウィクトルナンバーと呼ばれるらしい

まあ私が４位に勝ったから私が３位！」

バレット「ふーん…」

エリス「という訳で私はこれから1位をぶっ飛ばしてきます！」

そう言うとエリスはくるっと一回転して教室の出口に駆けていった

エリス「あ！私が高校最強ベストワンになった暁には飯を奢ってあげる！！だからこの教室で首を長くして待ってなさい♪」

バレット「あぁ、忘れてなければなー」

力なく手を降るバレットに満面の笑みを向け足早に教室から立ち去るエリス

バレット「ていうか…お前４位だろ…まぁいいけど」

…

放課後　体育館裏

エリス「ちゃんと果たし状は読んでくれたみたいね！」

???「はァ…時代劇の見すぎじゃねぇのか？」

エリス「靴箱に女の子からの手紙なんてドキッとしたんじゃないの？第1位さん？」

???「つぅか…とりまお前は死にたいってゆう解釈でいいのかぁ？」

エリス「ふふっ、第4位ですらあんなヌルイ高校のベストワンなんて底が知れてると思うけど？」

???「4位？4位…あー、なんだっけなぁ…アクアパラソルだかライオディアスだったか…」

エリス「私もどんな能力者か忘れちゃった，弱すぎてあなたの能力も覚えてられるか怪しいなぁ」

???「てかよぉ…お前ガチで頭悪ぃなぁ知ってるかぁ？この高校のベスト3のメンバーは二年間ずっと不動なんだぜ？第4位以下なんざ周一ペースで入れ代わってんだよ…もう分かるよなァ？4位以下と3位以上じゃあ…圧倒的な実力の大差があるんだよ…クヒヒヒ」

まるで悪魔のような笑いを浮かべる第1位に若干であるが恐怖を覚えた…
だがそれ以上にエリスは自分が一番強いという自信を持っていた

エリス「ずいぶん喋る口数の多い1位さんね、４位を軽く捻られて焦ってるの？」

？？？「あ？クヒッ　いいねぇその溢れる自信良いよ良いね全然オッケー
　そのプライド…ズタズタにしてやりたいわぁ…じゃあそろそろ開戦ってことでぇ…」

すると1位は片足を何かをしようとした
が、それと同時にエリスは片腕を前に出しそこから閃光弾のようなものを撃ちはなった

これは彼女の
大気中の空気を圧縮して利用できる能力
空気を圧縮し高質量の弾丸を放ったのだ
名を”本命空気～エアロバスター～”

が、確実に第1位へと向かっていったはずの弾丸は右に大きく反れ、近くにあった花壇をぶち壊した

エリス「やるじゃない！」
間髪入れずにエリスは細かい弾丸を百発ほど放射状に撃ち放つ
攻撃を反らされるなど今まで戦ってきた念力や重量操作の能力者で慣れっこだ

???「クヒヒヒ…」

…まるで全ての弾丸が第1位を恐れるようにそれぞれがバラバラに反れていった

鳴り響く爆発音…地面や壁、近くにあった倉庫などはボコボコになったが

第1位は傷ひとつ付いていない

エリス「っ…！？」

???「さぁ～て…俺は一体何をしたのかなァ？

全く気づけていないアホ面にご褒美でぇす♪」

第1位は足元の石を踏み砕いた

その瞬間、エリスに激痛が走った

腹部に先程の石の破片が全て刺さっていた

エリスと第1位の距離は15メートルはある。まぐれで破片が全部こっちに飛んできた…とは考えにくい

これは…奴の能力

エリス「念動…力…？」

血が滲む腹部を押さえながら相手の能力の本質を見極めようと試みる

???「クヒヒヒ…つか、全然ちげぇよ

てかそれじゃ超能力者ってか？そんなダセェ代物じゃぁねえよ俺のちからは」

すると第1位は突然エリスの目の前まで迫ってきた

エリス「ひっ…！」

驚くエリスの表情を見て一層笑顔を濃くした第1位は
エリスの腕を掴み上げた

???「クヒヒヒやべぇマジで細い腕ぇやべーよ
ってか無謀な勝負にあっさり負けた敗者にはどんなご褒美を
あげようかなぁ？」

エリス「や…やめ…ッ…」

〜1A教室〜

バレット「はぁ…もうレポートは無理そうだな…」

積もりに積もったレポートを絶望的な表情で見つめ肩を落とすバレット

ふと外野の雑談が聞こえてきた

A「おい聞いたかよ、能力者同士が体育館裏でバトってたってよぉ」

B「おう、ビックリしたぜ…しかも片方は高校最強だとよ…」

C「どうやら不動のまま相手を打ち負かしたとの事らしいですよ
今頃第1位にいたぶられてるんじゃないですかね」

バレット「…」ガタ

すこしばかり心配になったので例の体育館裏とやらに行ってみる事にした
おぼつかない足取りで「勉強どうしよう」「腹減ったな」などとブツブツ言いつつ歩いていると体育館裏に着いた

とりあえず人が2人居るのが見えた
エリスが血を流して倒れているのと…銀髪の黒服男子…

バレット「何してんだよ」

気付くと口が開きそう言っていた

???「何って…とりま…ご褒美タイムってところかなぁ?」

バレット「何やってくれてんだ…お前…」

気付くと拳を握り奴を睨み付けていた
エリスはバレットの幼なじみ、いつも無駄ににこやかに振る舞ってそれが今、苦悶の表情で地に伏せている
それがなかなかどうして許せはしないようだ

???「つか、お前はどうゆう能力で俺を全然楽しませてくれんのかなぁ?」

バレット「無ぇよ!能力なんて!」

???「は？」

バレット「むしろ欲しいくらいだ！！

???「はぁ…ブフッ…なんだよそりゃぁ…ククアホかマジで
とりま…マジにひ弱な虫一匹がぁ…恐ろしい恐ろしい鷹に頭
摘ままれにきたって事でいいんだよなぁ」

バレット「さぁな、俺にはお前はヒヨコに見えるがな！」

2話　デュアルブート

体育館裏
放課後もとうに過ぎ夜が訪れ始めていた

???「つーかよぉ…お前マジに頭悪ぃなぁ…てか、自暴自棄にでもなっちゃってんのかぁ？
脳無しの鼠に俺の名を教えてあげましょう、ありがたいだろ？
俺の名は”デフラグ・ブルーバック”つかお前はこの先一生この名前に怯えて過ごす事になるんだよなぁ…可愛そうだわ…」

バレット「名前なんて聞いてねぇ！エリスに何をした！」

デフラグ「あ？…あーいや、大丈夫だって！ただ石ころを刺してやっただけさぁ
ま…俺の事を一生忘れないように深く切ってあるがな…クヒヒヒ」

バレット「っざけんな！この野郎！」

デフラグ「ふざけてんのはてめぇだろ…無能力者が最強能力者にケンカ売るなんざギャグにしても笑えねぇぞ」

バレット「うっせぇ！」バッ

バレットはデフラグに向かって飛びかかった

デフラグ「クヒヒヒ…馬鹿だなぁ…”地面から離れて直進する”なんて、マジに”軌道に乗って俺に向かってる”状態じゃねえか」

確かにバレットは確実にデフラグに向かう軌道に乗っていた
しかしながら全く違う方向の壁に追突していた

バレット「ぐはっ！」

左肩をぶつけ反動で地面に叩きつけられた

バレット「お前…何しやがった…」

デフラグ「あぁ？　あぁ、ま、雑魚には教えても支障無ぇか

俺の能力は”二色配線～デュアルブート～”　性質としては”軌道変化能力”って言った方が分かりやすいんだが
俺のデュアルブートは少しばかり異質な物も関わっているらしいからまぁ…本質とは違うわなぁ」

バレット「軌道変化…？」

デフラグ「てか…体で理解すれば良いんじゃねえのか！？」ドゴォ

疑問の表情を持つバレットに間髪いれず
横にあった体育館倉庫の窓を蹴り割るデフラグ
すると割れたガラスは全てバレットの方へ向かった

バレット「なっ…！」

すかさず飛び退き避ける

…だが避けきれず足に二発ほど食らう

バレット「くっ…要は念力ってわけかよ！ややこしい説明すんな！」

デフラグ「てか念力じゃねーつってんだろマジで頭大丈夫かお前

俺が放つ攻撃は全てお前へ向かう軌道に向かう

だがお前の攻撃は全て俺へ向かう軌道から追い出されて

当たらねぇ…はァ…簡単じゃねえか…」

バレット「ぐっ…なら…！！」ダッ

バレットはデフラグに向かって走る

拳を高く振り上げながら…そう、肉弾戦に持ち込む作戦だ

デフラグ「はっはぁ！無能力者は接近戦しかできねぇわな！」ガキン

更にもう一枚のガラスを割りバレットに向かわせる

バレット「食らうか！！」

素早く横に跳びかわす

すかさずデフラグの頬に一撃、パンチを浴びせる

デフラグ「ぶはっ！」

バレット「その攻撃は”俺の居る場所”に向かってくるだけだろ！
直進しかできないなら避けちまえばなんの意味も無え！
！」

デフラグ「ッざけんなァ！！」

殴られた驚きと怒りでぶち切れたデフラグは
懐からナイフと数本のボルトを取りだし投げ
即座にバレットへの軌道に乗せた

バレット「おま…！！うぐっ！」

奇襲とも言えるその攻撃には左手でナイフだけでも庇う事しか出来
なかった
数本のボルトも刺さり左手は完全に負傷した

デフラグ「ッ…！！
はッ…てかしかしなんだァお前、能力攻撃に耐性知識あ
りすぎだろ
無能力者のくせによぉ」

バレット「こちとら能力者様には憧れ敬いっぱなしなんだよ！
何度欲しいと思ったか…でも俺には知識を付ける事しか
出来ない
だが…お前みたいな能力者には憧れねえ！後輩の女の子
1人いたぶってニヤついて何が最強だよ！！」

デフラグ「つか…なんですかぁそのつまんねー理由はァ
とりまお前今自分がどうゆう状況下に居るのか理解でき
てんのか？」

すると上着をバッと開き
中から無数のボルトとナイフが姿を見せた

狼狽(うろた)えるバレットの後ろで呻くような声が聞こえた
怪我で起き上がれない体で、涙と泣き顔でくしゃくしゃな顔で彼女は呟く

エリス「逃げて…バレット…私の為に戦わないでよぅ…」

エリスとバレットは幼稚園からの幼なじみだった
しかし体も弱く、自分勝手でケンカ腰で男勝りなエリスは
色々な所でいじめを受けたり、絡まれたりしていた
そんなとき、いつも助けてくれたのはバレットただ1人だった
ケンカで額から血を流していても、どこを怪我しても、”お前が無事なら良かった”その台詞と笑顔を何度聞いたことか

エリスにとってそれはコンプレックスになっていた
私がもっと強ければ、バレットは怪我をしないで済む
私がバレットに辛い思いをさせてる、不幸にしてる
そんなとき、彼女に能力が宿った
強さを手に入れた、私は最強だ。バレットに守って貰わなくていいんだ
彼女のコンプレックスは消えた。

はずだった

バレット「お前を見捨てて逃げる…？出来るわけないだろ！！俺が必ず守ってやる！」

デフラグ「俺が操れるのは単純に”お前を狙う軌道”だけじゃねえ！
”どの方向から”狙うかも精密操作できるんだよ！
クヒヒヒハハァ！！全方位から狙われたら流石に避けられねえよなぁ！！」

バレット「舐めんな！そんな程度で…」

デフラグ「おいおぃ…てか照準向いてんのはお前だけじゃねえんだぞ
後ろの馬鹿女もだ！ハハハハァ！！」

バレット「なッ…てめえ！！」

やめて、そんな目で見ないで
バレットの目、怖いよ…まるで…自分を犠牲にしてでも私を…
嫌だ…私の為に戦わないで…

エリス「バレットぉ！！逃げてよ！！私なんか守らないでよ！！」

バレット「何いってんだ！！全く聞こえねーぞ！！そんな言葉！！」

デフラグ「いいねぇ！！やべーよ！マジで！つか大切なもの！！守ってみせろよ！！あ〝ぁ！？
どうやって守るのか見せてくれよ偽善者さんよォ！
究極の二択だぜ！？テメーの命か！！女の命か！！どっち守るんだよ！！」

バレット「どっちもだ！！」

デフラグ「はァ！？」

バレット「大切な人なら死んででも守りたいさ！！でもな！
死ぬのは間違いなんだ！死んでしまったら大切な人を泣かせてしまう！悲しませてしまう！不幸にしてしまう！！
俺は生きてこいつを守る！！」

エリス「バレット…やだ…嫌…やめてよぉ…」

デフラグ「……カッコつけてんじゃねえええ！！」

デフラグは無数のボルトを宙に放った
そして同時にデュアルブートを発動
バレットとエリスを囲むようにボルトとナイフが飛んでいく
そしてエリスの前に立ち塞がり一歩も動かないバレットへと直進していく…

その瞬間

爆発が起きた

砂煙がデフラグに襲ってくる

デフラグ「あぁ！？…つか…なんだよこりゃ…ふざけてんのかマジで…！」

砂煙が晴れ前方に目をやると炎が上がっていた
中にバレットが居る

バレット自身から出るその炎は、まるで盾のようになっていた
ボルトなど全て溶け落ちて消滅していた

デフラグ「は、なるほどなぁ、ラッキーだなお前
今この瞬間、能力発現ってわけかよ！」

バレット「これが俺の…」
すると炎はデフラグに向かい直進する

デフラグ「でもなぁ！！ラッキーはこれまでだ！炎の軌道が操れないなんて誰が言ったんだコラァ！」

すかさずデュアルブート発動
時速１２０ｋｍ　重量９６，７ｋｇ　距離にして半径１０ｍ以内であれば操作可能なのだ
炎など簡単に操れるはずなのだ

だがデフラグは気付くと空を見ていた

デフラグ「は…？」

先程の火炎に吹き飛ばされていたのだ
軌道が…変えられない

デフラグ「なッ…んだよ…つか…意味わかんねぇぞ…
発動係数は…元素の乱数調整…こいつの炎には精神的な感性が加わってんのか？
ダメだ全然理解できねぇ！！なんなんだよ！！お前の炎

はよォ！！」

バレット「うるせぇ知るか…そんなの！！」ダッ

拳に炎を宿らせデフラグに向かい走り出す

デフラグはもはや一切武器を持っていない

立ち竦(すく)むしかできない

バレット「うおおおおおぉぉぉ！！」

強烈なパンチが真っ正面からデフラグの顔面に当たった

何mか吹き飛び、デフラグの意識は途絶えた

…

数日後

1A教室

あの時俺に宿った炎は何故デュアルブートを撃ち破ったのか

それは全く分からないが、エリスは無事だった

あのあとすぐに先生が救急車を呼んでくれたおかげで大事には至らなかった

だが…エリスは能力を使えなくなった

能力についての様々な部分は現代の科学では解明されておらず
医師によると”精神的なショック”が原因だそうだ

エリスは心を閉ざし、家族以外とは口を利かなくなった
…勿論、俺とも
これからしばらくは入院して精神面をケアしていくそうだ
しばらくは、会えないだろう

バレット「はぁ…」

落ち込みなのか気疲れなのか分からないため息をつく彼にクラスメイトが話しかけてくる

ビオランテ「どうしたんだぃバレット、その哀しい表情は」
アニーケィ「仕方ないね…エリスが居なくなったもんね…歪みなく頑張ってよ」
キョシ「ですね…まぁ…バレットさんがため息つくのは昔からですが」

バレット「…あぁ」

もうこいつらと、エリスも一緒に馬鹿みたいに騒いで遊ぶ事はないんだろうか…

俺はあの日…エリスを守っていたつもりだったのに
苦しめてしまってたのか？
そう考えてるうちに、ふと涙が一粒だけ落ちた

明日からまた頑張ろう

3話　クラスメイト

雲ひとつない晴天で
5月　春特有のぽかぽか陽気で遊びに出るには持ってこいな休日だ
そんな日に、バレット・ルージットもまたクラスメイトと遊ぶ為待ち合わせしていた

バレット「いい天気だなぁ」

などとこれ以上ないほど当たり障りのないセリフを吐き
ふと腕時計を見ると昼の一時丁度だった

すると向こうから女の子の声がする

「おまたせでーす」

バレット「おぅ」

彼女はバレットのクラスメイトであり友人である
名を”キョシ・サンカズヤ”
黒いショートヘアで瞳の大きい美人さんだ
中学の一年生からの友達だ
いつもは休日は最低でも3人で出かけるのだが
エリスが欠けてしまった為二人きりなのだ

キョシ「ごめんなさい、待ちました？」

バレット「あ、いや、今来たとこ」

キョシ「ビオランテくんも誘ったんですけど忙しくてこれないだそうです
そっちにも連絡来てましたよね？」

バレット「あ…いや、ごめん俺携帯持ってない」

意外な返答に驚きを隠せないキョシ

キョシ「ぇえ！携帯なんて今どき彼女も友達も居ないぼっちさんですら皆持ってますよ！？」

バレット「なんでそんなやつが携帯持つんだよ…
連絡だったら家に固定電話あるから取れるし」

キョシ「外出中でも細かい連絡の取り合いとか…とにかく！無いと不便ですよ！
今からでも契約してきましょうよ！携帯！！」

バレット「…めんどくさい」

キョシ「知ってますか？”善は急げ”ですよ！バレットさんが携帯持ってないなんて嫌ですよ！」

バレットの右手を引っ張り
眉間にしわを寄せ大きな瞳でバレットを見つめながら
唇を尖らせ無理やり”携帯ショップ”なるものへ連れていった

……

～携帯ショップ～

店員「はい、では契約完了致しました
　　ではこちら月額のプランで…通話料金の…」

あっという間に契約は終わり
そして他様々なお得的な要素満載なサービスプランへの勧誘が始まった
何故だかキョシはしたり顔で嬉しそうだ

キョシ「何気に私と同じ機種ですねバレットさんっ」

バレット「何気に…って、お前が無理やり…
　　まいいか、腹減ったし飯でも食べに行くかぁ」ガタッ

とりあえず朝から何も食べていないので
店員の勧誘を軽くあしらってさっさと立ち上がる
しかし携帯みたいな小さい機械は全然触った事がないので早く慣れる為に携帯をいじりつつ店を出た

バレット「えと…電話…つってもまだ登録してないか」

キョシ「じゃ私がアドレスと番号送るので携帯を無線待機モードに…」

バレット「いや分からんしなにそれ…」

バレットがキョシに質問しようとした所で
急に背後から男にぶつかられた
はずみで宙に舞った携帯をなんとかキャッチしホッと一息ついた所で辺りを見渡す

「邪魔だってんだよ！ボウズ！！」

さっきぶつかった男は覆面とサングラス
両手でカバンを抱えて息を荒くして向こうに走っていった

その直後、後ろから少女の声で

「返してぇ！！」

声がした方を振り替えると
恐らくあのカバンの持ち主であろう少女が涙目で腰を崩して座り込んでいた

キョシ「ひったくりですよ！」

バレット「待て！！」

間髪入れず走ってひったくりを追いかけた
後ろからタックルをかましひったくりはバランスを崩し電柱に激突する
カバンは地面に落ちた

ひったくり「ぐッ…てめぇ…ただで済むと…うぐっ…」

鼻を強く打ったひったくりはうずくまって苦しんでいる

キョシ「良かったぁ…バレットさん怪我はしてませんか？」

バレット「おう、全くあぶねーな…危うく携帯壊れるとこだったぞ

女の子「あ…あの！ありがとうございます！！
な、なんてお礼を、お礼をしたらいいか！
ああの私メイカって言います！」

長めの茶髪をなびかせる少しあどけない口調の彼女
名を”メイカ・ワットスク”

バレット「いや、大丈夫だって
ほら、これお前のだろ？」

カバンを拾いメイカに渡すバレット

メイカ「あ、ありがとうございます！本当に助かりました！
その…あの！三万でいいですか！？」

バレット「は！？」

そう言うと財布から三万円を取りだしバレットに渡そうとしてきた
お礼を期待したわけではないし、周りからは淀(よど)んだ視線が飛んできて戸惑う

バレット「いや、いらないから！お金は大切にしろって！」

そんなやりとりをしている間に二人の背後から声がした

キョシ「きゃっ！？」

先ほどのひったくりがキョシを捕まえ
ナイフを首もとにあてがっていた

ひったくり「オラお前ら動くんじゃねーってんだよ！
女ぁ！コイツの命がおしけりゃそのカバンを寄越しなってんだ！」

バレット「お前っ…そんなに女の子のカバンに興味があんのか！」

メイカ「う、ぇ、無理です！渡せませんから！」ダッ

メイカはカバンを持ってあっさり逃げた
その瞬間、彼女のカバンからカードのような物が地面に落ちた

ひったくり「なっ…このやろう！」

慌てるひったくりの肩を誰かがポンと叩く
金髪ショートヘアでのっぺりした顔つきの青年だ

？？？「おいおいタクリ…アレが奴らに渡りそうとはいえ…
こんな真っ昼間街道ド真ん中で騒ぎ起こしちゃケツから食われちまうぜ？」

タクリ「ＴＫＣさん…でも…」

どうやらひったくりの名前はタクリ
謎の男はＴＫＣというらしい

ＴＫＣ「まっ、女のケツ追いかけるなんざ”コイツ”に任せりゃいいじゃねえか
行け！ジャント！！」

するとＴＫＣの体から紫色の蒸気が出て
やがておぞましい顔をした巨人へと姿を変えた

周りに居た一般人たちはその姿を見るや一目散に逃げていく

バレット「なっ…お前能力者だったのか！何をする気だ！」

タクリ「ちっ…お前らはもういいってんだよ、オラ彼女返してやっからさっさと帰れ」

キョシ「わっ…」

すると先ほどのひったくりのタクリはキョシをあっさり返した
手荒く放った為、バレットの胸に飛び込む形になった

バレット「おっと、大丈夫かキョシ？」

キョシ「あ…はい！それより…なんですかあの巨人！？」

バレット「知らねえ…でもあの女の子を狙ってるってなら放っておけねぇな」

ＴＫＣ「命令はあの女の追跡と取り抑え、さぁ行けジャン…ん！？」
ジャント「シュプシャパシェロスシャシャ」

ふとＴＫＣが紫の巨人”ジャント”の方を見ると
頭部が焼けて苦しんでいる
バレット「おい！もういいだろ！あの女の子になんか恨みでもあんのか！」

ＴＫＣ「おうおうなんだぁ誰かと思えばバレットくんじゃないか、コイツにケツを掘られたくなきゃさっさと去るんだな」

バレット「なんで俺の名前を…！？」

ＴＫＣ「ありゃ、随分寂しい事言うなぁお前は」

バレット「（…？でもコイツの顔…どこかで見たような…どこでだっけ…）」

タクリ「ちっ…ＴＫＣさん、コイツは俺が引き受けますんで、あの女頼みます」
ＴＫＣ「おう、頼んだぜ！」

この場をタクリに任せ、ＴＫＣは巨人と共にメイカを追いかけた
バレットが止めようとするがタクリの手から放たれた何かに邪魔をされた

バレット「氷…！？」

タクリ「俺の能力は”氷狩～アイスショテラー～”
空気中の水分を瞬間凍結させ利用できるってんだよ
お前の炎と対になるような力って訳だな…」

バレット「キョシ！離れてろ！」

キョシ「は、はい！」

キョシを戦いに巻き込まないように退かせたところでタクリが繰り出してきた

空気中の水分を凍らせ手に余るほどの大きさの氷の塊を三個ほど作りそれをバレットへ向けて飛ばす

バレット「くっ！」

すかさず避け火球を撃ち放つ
しかしタクリは予め(あらかじ)左手に氷で作った盾で身を守った
いくら氷が炎で溶ける。とは言っても一瞬激突した程度では消滅する事はない

バレット「お前らはその能力を女の子1人追いかけ回すのに使うのかよ！」

タクリ「お前、わかってんのか、俺は”ウィクトルナンバー”元4位の
タクリ・クビクワレだぞ！」

バレット「知るか！そんな名前！！たかだか4位程度で自慢してくんな！！」

そう言うとバレットは先ほどより大きい火球を撃ち放った
しかしまたしても氷の盾で防御された
更にタクリは右手に氷で作った大剣を握った

タクリ「こっちにも事情があんだよ、大人しく退いてはくれねーか
命を捨てたくはないだろ？」

バレット「お前、気付いてないようだから教えてやるよ」

タクリ「！」

バレット「お前の力ってのは空気中の水分を使って武器や攻撃に利用するんだろ
…ならこの短時間でその盾やら大剣なんか作ったら”空気中の湿気”って奴も沢山奪ってんじゃないのか」

タクリ「な…！」

その瞬間、バレットの周りを巨大な炎が包んだ
湿気が無くなり空気が乾燥し、火力が著(いちじる)しく上昇したのだ
あまりの熱気にタクリの盾や剣は水に変わり消滅した

バレット「はぁああ！！」

まるでドラゴンののような巨大な炎が拳から撃ち出され
タクリは吹き飛ばされ壁に激突し気を失った

バレット「ふう…よし、あのＴＫＣとか言う奴を追いかけないと！」

キョシ「あ…待ってくださいバレットさん！
これ、彼女がさっき落とした物なんですけど…」

キョシが見せてきたのはカードのような物で
メイカの顔写真が貼ってあり、学生証のようにも見えたが丸っきり

違う物だった

それには”ｇｏｄ　ｅａｒ　ゴッドイヤー”という彼女が所属している事務所、機関の名前が書いてあり
様々なコードアドレスや数字が羅列されている中
”人権ｌｅｖｅｌ　０，２５”と書かれていた
その文字にただならぬ気配を感じ、バレットの口角は下がり冷や汗をかいていた

キョシ「なんか…危なさそうですよ…
あの女の子とは関わらない方がいいんじゃ…」

バレット「いや…彼女が何者であっても、現に今巨人に襲われかけてる
俺は助ける、メイカを」

キョシ「あはは、バレットさんならそう言うと思ってました。私も付いていっていいですか？」

バレット「ヤバイと思ったらすぐ逃げろよ」

そう言うと2人はメイカが走って行った方向へ同じく走った
ビル街脇の、一通りの少ない細道に2人の影は消えた

4話　ゴッドイヤー

バレットとキョシは、ひょんなことから出会った少女メイカを救うため
ＴＫＣと恐ろしい巨人ジャントを止めるため
ただただ走っていた

しかししばらく走っていると前方に壁三面の行き止まりが見え
同時にＴＫＣとジャント、恐らく気絶してるであろうメイカが倒れていた

ＴＫＣ「ちぃ、手遅れって奴か…こりゃケツをやられたな
こんな目立たない場所を待ち合わせに使うとはなぁ
奴らにバレたか？俺達の存在が」

バレット「おい！何してんだ！！メイカに何した！」

ＴＫＣ「おっ！？どうしたバレットこんなところまで！
この女に金でも貸してたのか？」

ＴＫＣはジャントを引っ込ませた
どうやら敵意はないようだ…

バレット「なんで俺の名をしってんだ！」

ＴＫＣ「何故って…お前と俺は同じクラスだろ？」

相手の素性すら何も知らず

どんな答えが返ってくるのかと体を強張(こわば)らせていたバレットであったが
意外な答えが返ってきたものだから、一瞬まぬけな顔をしてしまったら仕方ないか
TKC「まぁ俺は入学式以来はクラスにあまり顔見せてなかったか
　それより聞いたぜ？バレットよう、お前高校の第1位を一捻りしたらしいじゃないか」
バレット「なんでそれを…」
TKC「だがどうしてお前は1位の座を欲しがらない？
　ウィクトルナンバーのリストを見てもランクは一切変わってなかったぞ？」
バレット「興味ないんだよそんなのは…あんまり目立ちたくもないしな
　俺の話はいいからお前らの事を教えろよ
　一体何をしてるんだ」
TKC「世界を守る為…なんて言ったら笑うか？」
バレット「なんだと？」
TKC「見ろ、彼女、カバンを持っていないだろう
　彼女はとある組織の下請けとして働かされていたんだろう
　カバンにはきっと運搬する極秘資材でも入ってたんだろうぜ」
バレット「じゃあ…なんだってメイカは気絶してるんだよ」

ＴＫＣ「運搬の最終作業は幹部の役目だ
下請けは皆幹部以上の顔を知らないし知る事は許されない
スタンガンやらなんやらでケツをやられて気絶させられたんだろう…」

キョシ「…なんで彼女はそんな事をさせられてるんですか…」

ＴＫＣ「簡単に言うと…」
キョシからの質問に親切に簡潔に説明しようとしたＴＫＣだったが自分を覗いたメイカ、バレット、キョシ以外の人間の気配が向こうからしたのだ
とは言ってもここは壁三面を囲われた薄暗い道
人が入ってくるのは後ろの道しかないのだが

???「彼女が何故下請けなどに属してるのか、それは、救われた子羊であるから」

キョシ「子羊…？」

バレット「誰だお前」

???「私は誰か、ならば言おう私はこの世界の恵まれぬ人間を救える神だ
何故か、それは私の能力が神の右腕と言えるからだ」

ＴＫＣ「はっ…よく言うぜ…しっかし悪徳組織の総括が顔見せとは…一体なんの風の吹き回しかな？」

バレット「な、なんだよ知り合いか？」

ＴＫＣ「いやぁ、こいつはなかなかの有名人でな
名前は”ロッシ・ヒークローズ”
表は”国境無き医師団”だの言われてる団体のトップなわけなんだが
裏は様々な悪徳金融や秘密機関のエーススポンサーって所だな」

ロッシ「だが私の功績はその細かな悪事をはね除ける程素晴らしいィ、それは何故か
君らは知っているかね、目にしたことがあるか？何を
恵まれぬ不運に苛(さいな)まれた哀れな人間をォ
目が見えず、耳が聞こえない、顔が爛(ただ)れ、腕脚が無い、身体が動かない
様々な不運を引いてしまった彼らに、私は救いを与えられるぅ、一体何で
無論、この能力”等価的治癒(ヒーリンジュリィ)”でな」

バレット「な、なんだ？よく分からないけど良い事してるじゃないか」

ＴＫＣ「あぁ、奴の能力は治癒系能力の中では最も効果の高い部類だろう…
発動条件さえマトモなら俺もこいつには関わらないんだけどな」

キョシ「発動条件…って、なんですか？」

ＴＫＣ「誰かの不自由を無くすのに、他の人間の自由が必要…って

ところかな」

ロッシ「その点については、私が説明しよう！何故か
もうここまで知られているのでは生かして帰す事は無いのでなぁ
私の能力はクセがあってな
回復力を得るには誰か別の人間の犠牲が必要なんだ
誰かの視力を奪って初めて、別の誰かの視力を治せる訳だぁ
私の組織”ゴッドイヤー”に下請けとして居る人間は皆、私が不自由から救ってやった者なのだ
そこに居るメイカもかつては目が見えないいたいけな子羊だったのだ
彼らは如何に過酷で危険な仕事を任せようとも嫌がりはしない、何故か
それ以上に、幸福となれた喜びが大きく！そして再び不自由な身となる現実に戻されるのが怖い！！
私は思う！何を、希望と絶望の絶妙なバランスこそが！！人間に与えられる最大の幸福なのだと！！」

キョシ「…メイカさんの、目が見えない…？」

ＴＫＣ「人を弄(もてあそ)んで何が幸福だ、このケツ野郎が…ジャント！出番だ！」

するとＴＫＣは紫の巨人ジャントを呼び出した

ＴＫＣ「あのケツ野郎を死なない程度にぶっ飛ばしてやれ！」

ジャントは命令のままロッシに向かって巨体をズンズンと前に向かわせ

拳を振るった

だがその瞬間、ジャントは真後ろに吹き飛んだ

ＴＫＣ「！？」

ロッシ「やれやれ…組織も物騒な物を作り出した物だな…何を
　空気中の水分を凝縮し瞬間膨張による衝撃波を撃ち出す武具を…」

彼等が戦いを繰り広げる中、気絶していたメイカは目を覚ました

メイカ「うーん…こ、ここは…？」

キョシ「あっ！メイカさん、大丈夫ですか？」

メイカ「あ、はい、私は大丈夫…」

周りの状況を認識するより先に
ロッシの声が耳に響いた

ロッシ「運搬が完了した今、そこのメイカという女も最早不要！！
何故か
　道中で君らのような屑と戯(たわむ)れられてるようでは困るのだよ
…ゆえに
　今後の仕事はまかせられん…」

メイカ「そ、そんな…私また暗闇に…」

キョシ「そんなこと無いですよ！
見てくださいよ、バレットさんは、メイカさんを助けるためにここまで来たんです
能力者に襲われても、怖い巨人に会っても
それでもメイカさんを助けに来る人が居るんですよ？暗闇なんて、あるわけないじゃないですか！」

メイカ「バ、バレット…さんが…」

二人はうち解け合い　メイカの顔にも笑顔が見えた

一方、バレットの炎、ジャントの格闘攻撃
ロッシはそのどちらも先程の”武具”で無効化していた
どころか、段々と距離を詰められて行き
背後は壁となっていく…

ロッシ「たかが水分の爆発と侮ってはいけないぞ？何故か
それはコイツには充分な殺傷能力があるからだぁ。それ故に
誰から死にたいか選びたまえ…」

ＴＫＣ「…ちぃ…ジャントも体力が限界だ…」

バレット「くっそ…ふざけんな！」

やけになりバレットは大きな火炎を撃ち出す

ロッシ「ハハハハ！無駄だとわかって…ん！？」

再び”武具”を使用しようとしたロッシであったが
何故だか作動しなかった

ロッシ「なにっ…！？」

そして炎を食らいのけ反るロッシ
体勢を立て直すより先にＴＫＣが凄い速さで迫り
そのまま胸板辺りに強烈な蹴りをお見舞いした

ロッシ「ぐあああぁぁ！！」
真後ろに吹き飛び気絶した
その背後で声がした

タクリ「うわっ、危ないってんだよ」

バレット「お前は…！！」

ＴＫＣ「おぅタクリ、さっきは助かったぜ。小細工をどうも」

バレット「え？何が？」

ＴＫＣ「要はロッシのケツ、つまり背後から空気中の水分ってやつを奪ったわけだな
　あんな小道具よりはタクリの方が水分を使うからな」

バレット「無駄遣いのプロか」

タクリ「黙ってろ」

ＴＫＣ「まぁいいさホラ、それより彼女の保護だ
　それとバレット、お前にはちょっと付き合って貰いたいんだがいいか？」

バレット「あ、あぁいいぜ」

その後彼らは人気の無い裏道を脱出した
ロッシという男はＴＫＣがとある上層の警察に差し渡すそうだ
やがてあの組織も総括を失い風化して解体されるだろうとのこと

メイカはと言うともう安全であるから家に帰そうとしたんだが「み、みなさんの役にたちたいんです！手伝わせてください！」と言い付いてきて
キョシは「私も付いていきますね」となんの躊躇(ためら)いもなく普通に付いてきた

結局全員でＴＫＣ達の居るとあるグループに入ることになったのだ

バレット「って！なんで勝手にお前らの仲間にされてんだよ！！」
ＴＫＣ「いいじゃないか、俺たちはあらゆる事件を解決する能力者軍団ってわけさ
　　う～ん、まあ今は他のメンバーは席をはずしてるがな」

タクリ「まぁコイツが仲間になればそこそこ戦力が充実しますしね」
ＴＫＣ「あぁ、俺は氷の能力者って言うから冷静な奴かと思ってエースに任命したんだが
　　まさか手柄を急いで公衆の面前で引ったくりするようなケツだとは思わなかったぜ」

タクリ「うっ…」

ＴＫＣ「よって、バレット！お前が今日から俺たちチームのエースだ！」

キョシ「すごいじゃないですか！」

メイカ「え、エースと言えば凄く偉いですよ！」

バレット「あ…はい」

ＴＫＣ「さぁメンバーも増えたし明日から大忙しだな！」

新たに加わったメンバーも含め５人には結束が見られた

さっさと帰りたそうな表情バレットと不満丸出しの表情のタクリを除けば彼らは正真正銘のチームだ！

…

次の日　～サブリミナ第一刑務所～

ロッシ「ぐうぅ…私が何故こんな目に…くっ…くくく…

ならば”組織”のことも洗いざらい吐いて奴等も道連れだ…」

？？？「なぁにそれぇ」

気づくとロッシの背後には少女が立っていた

ロッシ「なっ…誰だ貴様！一体どこから…」

???「武具をわざわざ貸し出してやったのにおじゃんにするしぃ
素人能力者にボコられてムショぶちこまれるなんてぇ
挙げ句私らのことをチクろうとするとはねぇ」

ロッシ「貴様…組織の人間か…！わ、悪かったって、許せ
そ、そうだ、私から奴らスパイ共の情報を提供するから…」

組織の冷酷さを知っているロッシは
彼女が組織の人間だと分かると
助けを求め始めた

その声は看守たちにも響いた

看守A「なんだぁ？なんか騒がしいぞ」

看守B「おいどうしたぁ…えーと、ロッシ…ヒークロー…」

「ぎっぎゃあああああああ！！」

その瞬間、巨大な爆発音と発光が起きた　ロッシの叫び声も

看守A「ッ…なんだおい！」

看守B「おいお前何を…
…うッ…これは…」

次の瞬間、看守2人が見たものは

多分”人間だったもの”であろう肉片だけであった
少女の姿も、そこにはなかった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9873z/

アビリティー・ウェイク

2012年1月2日00時50分発行